

ただいた、大久保千名美さんに感謝いたします。

文 献

- Bjerknes, J., 1919: On the structure of moving cyclones, *Geofysiske Publikationer*, 1, No. 2, 1~8.
- and H. Solberg, 1921: Meteorological conditions for the formation of rain, *Geofysiske Publikationer*, 2, NO. 3, 2~61.
- and H. Solberg, 1922: Life cycle of cyclones and the polar front theory of atmospheric circulation, *Geofysiske Publikationer*, 3, No. 1, 3~18.
- Carrier, G.F., 1971: The intensification of hurricanes, *J. Fluid Mech.*, 49, 145~158.
- Dickson, R.R., 1975: Weather and circulation of August, 1975, *Mon. Wea. Rev.*, 103, 1027~1031.
- Hurricane-1 1976: 16mm Time-lapse motion picture of clouds by Satellite (SMS-2) distributed by the California Institute of Earth, Planetary and Life Sciences.
- 木村竜治, 1977: スピンアップの話, *海洋科学*, 10月号, 38-44.
- Logergist, 1964: 統物理の散歩道, 岩波書店, 157~162.
- Miyazawa, S., 1967: On vortical mesoscale disturbances observed during the period of heavy snow or rain in the Hokuriku district, *J. Met. Soc. Japan*, 45, 166~176.
- Sugimoto, T., 1975: Effects of boundary geometries on tidal currents and tidal mixing, *J. Oceanog. Soc. Japan*, 31, 1~14.

昭和53年度の学会財政の見通しについて

会計委員会

昭和53年度、当学会の運営方針は、学会活動を通じ、国際交流を計るとともに、国内的には支部活動を容易にし、かつ、活動の成果を会員に幅広く伝えることに努める方針が打ち出されている。

上記した方針を実施するに当たり、下記のような企画が考えられている。

(1) 気象集誌、天気の内容の充実

天気については、“研究へのアドバイス”“英文論文についての注意”“入門講座”等の新しい企画がある。

(2) 教育および普及の分野に力を入れる。

(3) 秋季大会の運営費の増額。

(4) 支部活動を容易にするための交付金の増額。

上記したような活動を、幅広く行なうためには、事務上の諸経費の節約を行なってもなおかつ多くの支出を伴なうので、常任理事会で討議を重ねた結果、A・B会費とも500円程度の値上げをせざるを得ないという結論に達した。

また、現在、当学会の基本金は65万円と僅少なので、基礎を強固にする目的もあり、昭和52年度までの繰越金

の中から、500万円を基本金に繰り入れたい（この案は5月の総会で説明予定）。

会計委員会では、以上の諸点をふまえ予算原案作成を行なった。この予算案は、本年2月27日開催された常任理事会で審議・了承された。以下、予算案の主な科目についての説明を行なう。

支出の部

1. 集誌、天気 の 印刷、編集、発送費 (2,157万円)

周知のように、当学会では2種類の機関誌を刊行しているが、内訳は、集誌736万円、天気1,421万円で、おのおの本年度実績の約1割増しとなっている。この額は、会費収入にほぼ見合う支出となり、会費のみでは当学会を運営できないことを示している。

2. 学会運営費 (1,160万円)

a. 会議費 (143万円)

各部委員会費、大会費等を含む科目であり、予算案では、地方大会費を40万円増額し80万円とし、講演企画委員会費を4万円、選挙管理費を4万円増額したほかはすべて据え置いた。

b. 学会賞、藤原賞 (20万円)

従来の7万円を3万円増額し、ともに10万円とした。

c. 奨励金、支部交付金 (137万円)

奨励金は据え置いたが、支部交付金は、現在の会員1名当たり350円を500円に増額した。

d. 事務費 (746万円)

事務の合理化については、会計・庶務委員会で検討中であるが、予算案では、人件費を7%増し、物品・印刷費は据え置いた。

e. 旅費 (25万円)

53年度の秋季大会への、関係役員、事務職員の出席のための交通費(17万円)、各賞委員会の委員出席旅費(5万円)その他3万円を計上した。

収入の部

1. 文部省助成金 (178万円)

気象集誌の発行に対し文部省より補助されるもので、本年度より28万円増額されている。

2. 事業収入 (470万円)

書店を通ずる雑誌図書の領布、研究ノート販売収益金(300万円)、および預金々利170万円を計上した。

3. 賛助会費 (222万円)

現在34団体が加入しており、賛助会費は、本年度に比較し6万円増となっている。

4. 投稿料 (120万円)

現行の集誌投稿料で、1~12頁で頁当たり3,000円、13頁以上9,000円に相当し、この額は、51年度に決定をみたもので53年度は据え置いた。

5. 会費収入 (2,225万円)

現在の会費は、A会員(天気)B会員(集誌・天気)おのおの3,500円、7,000円であるが、後記理由により、两会費とも500円の値上げが必要となる。A・B会費の値上げに関連し、学生および外国会員の会費も値上げしたい。その場合、各会員の会費は次のようになる。

A : 4,000 (3,500), B : 7,500 (7,000)

学生A : 2,500 (2,200), 学生B : 4,700 (4,400)

外国A : 5,000 (4,300), 外国B : 9,200 (8,600)

なお、会費改訂による会費収入2,225万円は、5月の大会における議決をまって、昭和54年1月から実施する予定であることをおことわりする。

会費の値上げについて

予算案では、収入の部第5項で、会費の値上げを前提とした会費収入額を計上したが、ここで改めて、値上げを行なった数字のうえでの根拠を示しておきたい。

学会の運営は、原則として、A・B会費、文部省助成金、および投稿料により賄われるべきであり、不足額は、賛助会費、事業収益金、雑収入などにより補なわれるべきものとする。そこで、集誌と天気に分け刊行に要する費用を計算すると、

集誌については：

(印刷・発送費－文部省助成金－投稿料)/会員数

天気については：

(印刷・発送費－広告料)/会員数

になり、各々について計算すると、集誌2,944円、天気3,404円となる。また、運営費は、1,160万円を会員数3,792名で割ると、会員1名当たり3,060円となる。

一方、現在の会費は、A会員3,500円、B会員7,000円なので、学会の運営を維持するための不足額はつぎのようになる。

A会員：3,404円+3,060円-3,500円=2,964円

B会員：3,404円+2,944円+3,060円-7,000円=2,408円

したがって、会費の値上げを行なわないとすると、不足額の合計は1,041万円となる。

以上の予定を補う財源として、賛助会費、図書販売収益金、雑収入の計692万円があげられる。この不足財源を投入しても、なおかつ349万円が不足することになる。

そこで、不足額を両会員の不足額の合計に比例して分割し、会員数で除すと、不足額は、A会費994円、B会費807円となる。以上のような計算を基にすると、A・B会費の値上げは、1,000円が適当と思うが、その一部は繰越金で賄い、A・B会費はともに500円位値上げしたい。なお、学生および外国会員の値上げについては、A・B会員の値上率を考慮して、前述第5項のようにした。

以上53年度の予算案の内容のあら筋を記したが、以上の案は5月の総会において可決する必要がある。

また、現在は概算の段階だが、本年度における繰越金は前納会費のほかに790万円となる見込みで、会費の値上げに異論のある会員もあると思うが、将来の運営も考えて、あえて会費の値上げ案を作成した次第である。なお、学会の財政、来年度の見直しなどに関し、御意見のある会員は下記担当役員に御連絡下さい。

担当理事

杉本 豊、立平良三

東京都千代田区大手町1-3-4 気象庁予報課